

教材名 星野君の2塁打（ 学校図書 6年 20p 「身の回りの大勢の人たちとの関わり」より良い学校生活、集団生活の充実、あかつき 6年 94p、「規則の尊重」より良い学校生活、集団生活の充実）

1. 本教材について

少年野球チームで一員である野口君はある場面で監督からバントの指示を受けた。しかしその指示には従わず、2塁打を打ちチームは勝った。しかし「チームで決めた規則を破った」として監督から出場停止を受けた、という話しである。

本教材の設問では「星野君の取った行動を通してきまりを守り、義務を果たすことの大切さについて考える」（あかつき）と書かれている。

本教材を読むと次のような疑問が浮かぶ。

監督が話すそれが規則になるのか、最初の話合いでは自由に意見が出て議論が行われたのか、少年野球というのは規律やチームワークの心を養うためにあるのか、野球を楽しむということは大事なのではないのか、出場停止というのは行為にふさわしいペナルティなのか、ペナルティはあらかじめ明示されていたのか、バントという作戦をどう考えるか。

2. 本教材を扱う際に、特に注意すべきだと考えたこと

教科書のように、監督の指示を規則と捉え、それに従うことが正しいことだという唯一の正解を導き出すのではなく、何が正しいのか、多面的に話し合うことを中心に考えた。

指導過程は1限で計画したが、ディベートまで行うには少なくとも2限は必要だと思われる。

3. 指導過程

	子どもの活動や教師の発問等	留意点
導 入	何らかのスポーツをやっている子どもが多いと思うので聞いてみる	
展 開	「星野君の2塁打」を各自で読む。質問を受ける。感想を聞く。 別府さんが星野君を出場停止にしたことをどう思うか、聞く。 4人くらいのグループに分かれ、別府さんの措置についてディベートを行う。 別府さんの行っていることに賛成のグループと反対のグループに分ける(教師が指名)。各グループで賛成、反対の言い分の根拠などを相談する。主張の仕方を相談する。 その際、別紙資料を参考にする。 2グループでディベートを行う。	音読しても良い。先生が読んでも良い。  ディベートは正式のものでなくても良い。ルールはあらかじめ決めて説明する。全員が何らかの形で参加できるようにする 司会もできるだけ子どもたちで行う
ま と め	教師がコメントする	できるだけ論点の整理が出来るようにコメントする

## 参考資料

前全日本ラグビーチームヘッドコーチ エディージョーンズ氏の発言  
(SANSPO. COM2015年10月13日配信)

さらに19年に向けて、日本ラグビーが取り組むべきことにも言及した。エディーHCは「日本のラグビーは本領発揮できていないと常に思っている。日本には優秀な選手がたくさんいる」と一言。続けて「日本では高校、大学、トップリーグでも高いレベルでパフォーマンスする指導ができていない。規律を守らせるため、従順にさせるためだけに練習をしている。それでは勝てない」と、日本ラグビー界の問題を指摘した。

元全日本サッカーチーム監督岡田武史の発言

元日本代表監督・岡田武史×JAXA 名誉教授・的川泰宣「人は、夢を追う仕事を応援したくなる」  
(au HAKUTO MOON CHALLENGE のHP より)

的川：野球の試合で、1アウト、一塁二塁、1点差で負けているときに、星野君がバッターボックスに立った。そこで、監督はバントのサインを出すんですが、星野君はサインを無視して打つんです。結果的にそれが二塁打になって、逆転に成功する。星野君は大歓声に迎えられただけで、監督はサインを無視されたので良く思わなかった、というあらすじです。そして私の学校の授業では、先生がクラスの生徒に「さて、星野君の行動をどう思いますか？」と問題提起したのです。ぼくなんかは「そりゃあ、勝つほうが嬉しいよな」って思ったんだけど、「ルールは守るべきだ」っていう人もいて、クラス全体の意見は大体半々になったんですよ。

岡田：面白いですね。サッカーでも2人で守る局面では、「1人は必ずボールを取りに行き、もう1人はカバーリングするために後ろにいる」と指示するのがセオリーなんですけど、2人でボールを取りにいけば奪えるチャンスだったのに、「監督の指示だから」と、失敗を恐れてチャレンジしない選手がいるんです。でも、そこで自分自身で判断してリスクを冒したチャレンジができないと本物のプロじゃない、とぼくは思っています。そういうチャレンジが日本の社会は少ないんですよ。自分で判断して、もしボールをカットできたら、それは最高の喜びだぞって伝えたくて、このチャレンジのことを「エンジョイ」って呼んでいます。まさに的川さんの話と同じだから、今度からサッカーのミーティングでも『星野君の二塁打』を使わせてもらおうかな（笑）。

他に参考文献として 『部活が危ない』 島沢優子 講談社現代新書